

学校帰りのトム

初めての三人での帰り道です。ぼんやりトムと、おしゃべりネロ、そしてもしもじサラのデコボコトリオです。トムはぼんやり気ままに歩いているし、ネロはトムとサラに交互に話しかけて、返事が返って来る頃にはに、もう次の話をはじめています。

サラはだれかと帰るのがどこかはずかしいような、こわいような気持ちになり、もしもじと言うよりはソワソワしています。どうきゆうせいみんなも、とてもおもしろい組み合わせだなあと思いながら横目で見ました。

三人は休み時間のやくそくのとおり、マメナシの木を目指します。その途中、腰の高さほどの木の柵がありました。するとサラがびよんと柵に飛びのり、トントントンわたって行きました。そのイメージとちがった軽やかなすがたに、ネロはびっくりしました。そのしせんに気づいたサラはハツとなり、はずかしそうに柵からおりました。サラは、いつも帰り道にこうやって一人であそびながら帰っていたのです。はずかしかったのは、こんな風に柵に乗ったりするのは変なことなのかなと思ったからです。

でもネロがびっくりしたのは、サラが変なことをしたからではありません。いつもと違うサラが見れた気がしてうれしかったのと、その軽やかさがとてもかっこよかったからです。

「おどろいてごめんね、サラ。でも柵をかるやかにわたる姿は、とてもかっこよかったよ」

ネロは思ったことをそのまま言いました。

サラは、かっこいいと言われたのがとても意外でおどろきました。サラにとってはただ楽しくてやっていたことだったからです。

「わたし、こうやって色んなところをジャンプしながらわたるのが好きなの。変じゃないかな?」

すぐにネロは言います。

「なにも変なことなんかはないよ。でも、そんなに軽やかにわたるのはむずかしそうだね。僕もやってみよう」

そう言うとネロは、ぴよんと木の柵に飛びのりました。そして、三つ目の柵でバランスをくずして落ちてしまいました。

「これはむずかしいや。サラはバランス感覚がすぐれているんだね」

そんな風にほめられるとは思ってなかったので、サラはうれしはずかしい気持ちになりました。

トムはさくに乗ることはせず、柵をながめたり、ちよつとさわったりしてました。

さらに歩くと、だんだんいつもとはちがう景色になってきました。並んでいた家たちの間隔は、どんどん広くなっていきます。その代わり気持ちの良い木々や原っぱがふえてきました。どの季節の木々も最高ですが、春はほんとうに最高です。寒い冬をぬけてゆるんだ空気にさわれ、木々はふんわりとした葉をつけます。その中にあわい花や、あざやかな花がまざり込み、そのコントラストは、どれも個性的ですばらしいのです。マメナシも、葉と花がとけ合ってしまったかのような、あわいコントラストが、まさに春そのものなのです。

それにしてもなかなかマメナシの木に辿り着きません。なぜならトムが案内人だからです。歩くスピードが本当にゆっくりなのです。しかしネロとサラは急かしたりしません。ふしぎなことに、トムと同じはやさで歩くと、今まで見えてなかったものが見えてくることに気づいたので、日の当たる道とかげになっっている道。さびれた家の柱。今まで目にも入っていなかったかばんに、犬たちの会話。まるで自分たちの町が、物語の中の世界だったのかと思うほど、すてきなものに見えました。そして、自分たち三人が、そのものがたりの主人公です。何かすてきなことが起こる気がして、このふしぎな気持ちを二人も楽しんでました。

砂利がしき詰められたくねくね道を、ゆっくり進んでいると、トムが突然「こっちだよ」と柵をまたいで、荒れた茂みの中へと進路を変えました。ほそうされた道から外れると、とたんに歩くのが大変になります。枝をふんではパキパキと音を立てます。そのたびにバランスをくずしてよろめくのです。足をさわる草にも、少しぬれていたり、虫が足にくっ付いたかと思うようなちよつとかたい草や、ざらざらとまとわりつく草もあるのです。進む速度が一気に遅くなり、なかなか先へ進めません。ネロとサラは自分の足元だけを見て、歩くのに必死でした。

しかし、ネロはふしぎなことに気がつきました。それはトムの進む速度がさほど変わらないと言っことです。確かに歩くスピードは相変わらず遅いです。ただ、更に遅くなると言っことはなく、トムはずっとそのままのスピードで歩き続けているのです。それは、サラが茂みの中を歩くよりちよつと早く、ネロが頑張っ歩いてトムにちよつと勝てるくらいのスピードです。

いったいどういうことだ？ とネロは思いました。そこで、トムがどうやって歩いているか、注意深く観察してみることにしました。トムは相変わらずぼんやりしています。荒れた茂みと言っしょうがいぶつを前にしても、変わらずぼんやりしているのです。荒れた茂みとぼんやり歩いていくトムは、なんだかとてもミスマッチです。

色々観察しているうちに、ネロはトムがゆっくり色んなものを見ていることに気がつきました。ネロとサラは荒れた茂みを前に、足元から目が離せず、一步一步、必死に進んでいます。

しかしトムは、足元だけでなく、ぼんやりと周りを楽しそうに見ながら歩いているのです。こんなに必死に足元を見ても歩きづらいののに、なんでだろう？ とネ口は思いました。そこで、物は試しとネ口もトムの真似をして、ゆっくり周りを見渡してみました。

空はだんだんと勢いを落とし、のんびりと夕焼けの支度を始めてます。木々には、新緑に色づき、冬を抜けた安心感と共に心地良さそうな葉が、一日の傾きを予感させるようにそよそよと揺れています。

そうです。自然と言うのは全てがつながっているのです。空も風も木々も砂利たちも、みんなが目配せしながら支え合って生きているのです。あ、忘れがちですが、もちろん「にんげん」も自然の仲間ですからね。全てがつながっていること、ネ口は習ったことはありません。しかし、ここまではつきりと感じたことは初めてのことでした。ふしぎな安心感に包まれました。まるで自然の輪の中に入れた気分です。(にんげんは最初から自然の仲間ですが、忘れてしまった人は多いのです)

ネ口はそれがとても心地よかったです。そして、同時につながりがはつきりと見えてきました。木の根が伸びて、それをよけるように草が伸びています。日の当たるところと陰になっているところでは、それぞれちがう草が生えます。歩きづらいところはやはり、小枝があったり、固い草が生えているところです。もちろん学校のように、きっかり決まっているわけではありません。しかし、淡い境界線が引かれているように、あるべきところにみんながいるのです。

トムを見ると、考えているのか無意識なのかは分かりませんが、しっかりと進みやすい道を見つけて歩いているのです。例え、どうしても通らなければいけない険しいところがあっても、その先に歩きやすい道に少しでも早く辿り着く道を進んでいきます。そして、一步一步慌てずゆっくり進んでいるので、つまづくことなく進んでいるのです。

その瞬間、ふとネ口はよく分からないけれど、この荒れた茂みの中に道が見えた気がしました。もちろんどこも歩きづらそうです。しかし、確かに一步一步足を出せそうところが、点々とあります。その点をつなげると道になって見えてきました。

ネ口はその点に向かって、ゆっくりと足を出していきました。さっきまでより確実に歩きやすいのです。ネ口はすごい能力を手に入れた気分になりました。まるで未来が見える魔法使いにでもなった気分です。そして振り返ると、ほそつされた道が、もう茂みで見えないくらい遠くに来ていました。

サラはまだ足元だけを見て、わたわたしています。全然進まないサラに向かってネ口が叫びました。

「サラ、足元ばかり見ていると進まないよ。周りをゆっくりと見渡してごらん。歩くのが楽になるよ」

サラは「足元見ないと倒れたり怪我しちゃいそうで怖いわ」と言いましたが、ネ口は「いいから、僕を信じて一回やってみて」と、なるべく落ち着いた声で言い聞かせました。

サラはしばらく辺りを見回したあと、ハッとしたような顔になり、ゆっくりとだけどしっかき進み始めました。きつとネ口が見た景色をサラも見たのでしょうか。3人の背より高い草むらにも入りましたが、ネ口とサラに不安はありませんでした。進むべき道が分かっていたら、そこがどんな険しいところだろうと勇気が湧くものなのです。（逆にも、どんなにきれいな道を歩いていても、行き先が分からなかったら不安になるものです）

背の高い草むらをだいぶ進み、草むらたちにすっかり囲まれ、視界は360度すべて、緑色になっていました。ネ口はもしかしたら自分も緑色になって景色の中に溶けちゃったのかとさっかくするほどでした。そんな時、緑色の中にポトポトと絵の具を落としたように、真っ白なものが点々と見えてきました。あ、これと思ったとき、草むらが突然終わり、

ブワツ

ゴー

そよそよ

。。。。

ネ口は目の前に広がったその景色にただただ立ち尽くしていました。ひらけた草原にマメナシが何本も立ち並び、真っ白な花をつけています。新緑と溶け合い、空とも溶け合い、風とも溶け合って、これを「春」呼ぶのでしょうか、それ以上の何か得たいのしれない喜びのエネルギーが、そこかしこでパチパチとまばゆい光を放っているのです。

少しして、ガサガサと音がしてサラも到着し、「あ、」と小さく声をあげて、その後はネ口と同じように立ち尽くしました。先に着いていたトムは誰かと話しているように見えました。そして、とても満足そうな顔をしていました。言葉がなくても、今3人がみんな幸せに包まれているのがお互い分かりました。

サラは2人が幸せな気分できてくれることが嬉しくなりました。そしてその時、友だちがいるっていいなって思いました。サラはどこかで友だちが出来たら、友だちに合わせなくてはいけない、気をつかわなくてはいけないと思っていました。でもみんなそれぞれ、それぞれのしたいことをしていて、喜びが誰かにあった時は一緒に喜べる。それが友だちなら、もっと毎日が楽しくなる。そして、トムとネ口はそんな友だちになってくれる。そう確信しました。

サラはモジモジせず、勇気を出して思ったよりだいぶ大きな声で言いました。

「ネ口、トム、私の友だちになって！」

ネ口の顔はこれ以上はないくらいに明るくなり、「もちろん！」と叫びました。トムは二十秒くらいぼんやりしていました。そしてゆっくりと大きく手を広げてドテンと仰向けに倒れました。二人は慌ててトムに近寄りました。トムはニッコリと笑い、そして大きくうなずきました。ゆっくりと起き上がったトムの背中のプローチにはたくさんママナシの花びらが挟まっています。